



完全否定を表す副詞「まるで」「ぜんぜん」「まったく」に関する一考察

朴, 秀娟

(Citation)

神戸大学留学生センター紀要, 22:41-57

(Issue Date)

2016-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009478>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009478>



完全否定を表す副詞 「まるで」「ぜんぜん」「まったく」に関する一考察

朴 秀娟

キーワード：まるで、ぜんぜん、まったく、完全否定、否定形式、述語のタイプ

1 はじめに

現代日本語における「まるで」「ぜんぜん」「まったく」は、次の例に見られるように、否定形式の述語とも肯定形式の述語とも共起し¹⁾、否定形式の述語と共起した場合、完全否定を表すという点において互いに類似している副詞である。文法的肯定形式の述語と共起した例である b の場合、互いに置き換えて用いると不自然、または非文法的になるが、文法的否定形式の述語と共起した例である a の場合、互いに置き換えて用いることも可能である。(本節の例 (1) ~ (6) は飛田・浅田 1994 より。その他の例は筆者による作例である。なお、例の下線及び括弧内の置き換えの判断は筆者による。)

- (1) a. 故郷は二十年前とまるで (= ぜんぜん / まったく) 変わっていなかった。
 b. (表彰式) まるで (= *ぜんぜん / ? まったく) 夢を見ているようです。
- (2) a. 教授の講義はむずかしすぎてぜんぜん (= まるで / まったく) わからない。
 b. (F1 レースで) セナ、ぜんぜん (= *まるで / *まったく) すてきだったわ。
- (3) a. もらった地図は古くてまったく (= まるで / ぜんぜん) 役に立たなかった。
 b. あいつの厚顔無恥には、まったく (= *まるで / *ぜんぜん) あきれる。

また、完全否定を表す「まるで」「ぜんぜん」「まったく」の場合、次のような語彙的否定形式との共起も可能である²⁾。

- (4) 費用は全額負担してくれると言ったのに、自分で出すんじゃまるで話が違うぞ。
- (5) 政治改革と選挙制度改革とは話がぜんぜん別だ。

(6) 道子だと思って声をかけたらまったく別人だった。

しかし、上記の(1)～(6)と同じく否定形式の述語であっても、そのタイプは必ずしも同じではない。次の例に見られるように、置き換えて用いると、現代日本語においては³⁾、不自然、または非文法的と思われる例がある。

(7) 病気なのか、ポチがご飯を {?まるで／ぜんぜん／まったく} 食べない。

(8) この映画は {?まるで／ぜんぜん／まったく} 面白くない。

(9) 言っていることが、さっきと {まるで／*ぜんぜん／まったく} 反対だ。

本稿では、このような点に注目し、現代日本語における「まるで」「ぜんぜん」「まったく」が共起する否定形式の述語のタイプの共通点と相違点について明らかにしていく。

以下、まず、第2節では、先行研究での指摘をまとめ、第3節では、本研究に用いた調査資料について示す。そして、第4節で、共起する述語のタイプにおける共通点と相違点について記述する。最後に、第5節で、本稿のまとめを行い、今後の課題を示す。

2 先行研究

副詞「まるで」「ぜんぜん」「まったく」については、「ぜんぜん」に関する研究を中心に、多くの研究が存在し、それぞれが共起する述語のタイプについては、次のようなことが指摘されている。

まず、小矢野(1995)では、「まるで」が共起する述語について、次のようなものが挙げられている。本稿で対象としているのは、①から④のようなタイプの述語であるが、①との共起は、現代日本語ではほとんど見られない(詳しくは、5.1節を参照)。

- ①「動作性概念の動詞の否定形」
- ②「否定の形容詞「ない」を含む連語」
- ③「否定概念を含む単語の肯定形」
- ④「異同関係概念を含む単語」
- ⑤「否定概念を含まない単語の肯定形」

次に、「ぜんぜん」と共起する述語については、服部（2007）が次のようなものを挙げている（以下、服部2007より見出しとして挙げられているもののみ引用）。

否定形式のもの、特定述語類（相違類／だめ／別／平気／大丈夫／OK／良い／普通／いける／余裕／まし）、その他（度量形容詞類⁴⁾／可能動詞類／評価的にプラスの語句／その他（「ずれちゃっている」／「セーフ、可」／「へっちゃら」など）

服部（2007）で言う「否定形式のもの」以外の述語については、野田（2000）でも指摘が見られ、とくに共起しやすい語として「違う」「だめ」が挙げられている。野田（2000）では、その他にも、「矛盾している」「デタラメ」のような「マイナス評価の語」、「他人」「からっぽ」のような「マイナス評価とは言えないが否定的と感じられる語」、「平気」のような「否定的とは感じられにくいが広い意味では否定的な性質をもつ語」が挙げられている。

最後に、「まったく」については、鈴木（1996）が、用法の推移とともに、「肯定表現及び否定表現との結び付き」がどのようなものであるかを述べているが、昭和期以降の例としては、否定形式との共起以外では、「肯定形式」の「否定的表現」（本稿では、語彙的否定形式として扱っているもの）として、「違う（違った）、別、別個、無一、不一」などを挙げている。

以上から、「まるで」、「ぜんぜん」、「まったく」は、文法的否定形式の述語だけでなく、語彙的否定形式との共起も見られ、語彙的否定形式の述語には、ある特徴が見られるということが見受けられる（例えば、異同を示す述語など（「異同関係概念を含む単語」（小矢野1995）、「相違類」（服部2007）、「違う」（野田2000、鈴木1996））。しかしながら、これらの副詞が共起する述語については、個別的な記述に留まっていることが多く、これら3つの副詞が共起する述語のタイプの共通点や相違点を述べたものは管見の限り見当たらない。本稿では、各々の副詞が共起する否定形式の述語のタイプに注目し、これらの間に見られる共通点と相違点について記述していくことにする。

3 調査資料について

本稿では、1950年以降に刊行された小説を調査資料として用い、実例をもとに分析を行った。基本的には、『CD - ROM版 新潮文庫の100冊』（新潮社より1995年

に刊行)を用い、1950年以降に刊行された小説46作品から用例を収集したが、本資料には、1990年代と2000年代の作品が収録されていないため、それぞれの年代の作品から3冊ずつ補い、合計52冊から用例を収集した⁵⁾。また、分析の妥当性を補うために、補助的な資料として、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJとする)も用いた。検索に用いたアプリケーションは「中納言」である。

4 共起する述語のタイプに見られる共通点

「まるで」「ぜんぜん」「まったく」に共通して見られる述語のタイプには、次のようなものがある⁶⁾。

① 動詞の否定形式

- a. 認識活動を表す動詞の否定形式
- b. 非動作動詞及び可能動詞の否定形式

② 形容詞相当の否定形式(～(が／の)ない)

③ <欠如・消滅>系の語彙的否定形式

④ <不一致>系の語彙的否定形式Ⅰ:「違う」「異なる」「別だ」類

⑤ <負の評価>系の語彙的否定形式

⑥ <気にしない>系の語彙的否定形式Ⅰ:「平気だ」

4.1 動詞の否定形式

いずれにおいても認識活動を表す動詞の否定形式との共起が多く、その他には、非動作動詞及び可能動詞の否定形式との共起が共通して見られる。以下、具体的に述べる。

4.1.1 認識活動を表す動詞の否定形式

いずれも「わからない、知らない、見えない、聞かない、感じない」のような、認識活動を表す動詞の否定形式と共起する⁷⁾。

- (10) 暗闇が濃すぎて、よほど近くに寄って見ないかぎりそこに何があるのかまるでわからないのだ。(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

- (11) 「ぜんぜんわかんないよ。いいよな、しかし。『どうぞ』3文字で。その省

- エネ。それだけで好かれるなんてさ」(北川悦吏子『ロングバケーション』)
- (12) 艦内にいると敵襲の際、拡声器の指令以外まったく様子がわからない。(北杜夫『楡家の人びと』)
- (13) 「パパと会ったの？」未紀はサングラスをかけたまま笑ったので笑いの意味は**ぼくには不明**だった。「会うわけがないでしょう。どんなかたかも**まるで知らないのに**」(倉橋由美子『聖少女』)
- (14) 「初対面は初対面なんだけど」健太くんが言った。「おじさんは僕たちのことを**ぜんぜん知らない**ってわけじゃないんだよ」(重松清『流星ワゴン』)
- (15) 東京にはあしかけ二年、順天堂にいたが、それは病院だけのことで外のこと**はまったく知らない**。(渡辺淳一『花埋み』)
- (16) 青洲にいたっては、話しかけても何も聞えないようだったし、朝晩の挨拶に門弟たちが頭を下げて**まるで見えない**のか、眠っている加恵の顔をじっと覗きこんでいて振返りもしない。(有吉佐和子『華岡青洲の妻』)
- (17) 鈴木とはばけるのが上手であつたらしく、終戦内閣の時でも閣議の席上都合の悪い話は耳が遠くて**全然聞えない**ふりをしていた由で、侍従長時代海軍部内の対英米強硬論や日本の右傾化にどの程度強い反対意見を持っていたかはよく分らない。(阿川弘之『山本五十六』)
- (18) 私は彷徨の必要を**まったく感じなかった**。(開高健『巨人と玩具』)

4.1.2 非動作動詞及び可能動詞の否定形式

「似る」「変わる」といった非動作動詞や、可能動詞の否定形式との共起も見られる。

- (19) 「なんじゃこりゃあ！」多田は呆然とつぶやき、「それ、誰の真似？全然似てない」と行天は笑った。(三浦しをん『まほろ駅前多田便利軒』)
- (20) 第二ラウンドの後半から第四ラウンドの前半にかけては、試合の流れが**まったく変わらなかった**。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)
- (21) 私はほとんど何も食わずに、オールド・クロウのオン・ザ・ロックを三杯飲んでた。彼女の食べる姿に見とれていて、**まるで食欲なんてわかなかった**のだ。(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)
- (22) ——弱音を吐くわけじゃありませんがね、と舳に突立ったまま森が言った。どうも矢代が、僕等二人じゃ少々心細いと言うんでね。何しろ藤木は**まるで**

遭げないし。(福永武彦『草の花』)

- (23) 「技師になったらぜんぜん山へは行けませんか」(新田次郎『孤高の人』)
- (24) 「そうじゃないんだ。うちのやつがね、肉を食べられないもんだから、いつも魚と野菜ばかりなんだ」「まったく食べられないの?」「うん。魚も頭なんかついてると気持ちが悪いって言うんだ」(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

4.2 形容詞相当の否定形式(「～(が／の)ない」)

いずれの副詞においても、形容詞相当の否定形式「～(が／の)ない」との共起が見られる。この中には、例(25)から(27)のように、それぞれ「無反応だ」、「無関心だ」、「無縁だ」といった形にすることも可能なものがあり、意味的には、次に述べる<欠如・消滅>を表す語彙的否定形式に近い。

- (25) 餌は、相変らず仕掛けてときのままだった。腐った魚の臭いが、つんと鼻をつく。《希望》を仕掛けてから、もう二週間以上になるというのに、まるで反応がない。(安部公房『砂の女』)
- (26) 勝負には全然関心なく、球の来る方向にバットを出すということだけに全身の神経を集中しているようだった。(新田次郎『孤高の人』)
- (27) すでに一年の余、勉学とまったく縁のなかった中学生たちは、与えられたつかのまの休暇中、ひっきりなしに仲のよい者同士が集まって離別の宴を開いた。(北杜夫『楡家の人びと』)
- (28) 「あの、なんていうか、親戚の姉ちゃんみたいなもん」「へえ」涼子にはまるでくったくがない。「……まるで興味ないね」(北川悦吏子『ロングバケーション』)
- (29) ただでさえ有名な小田島のレッスンを受けるのは気が重いのに、涼子がライバルになるなんて……。今の瀬名には、全然自信がなかった。(北川悦吏子『ロングバケーション』)
- (30) パンを食べるかどうか聞かれて、蒼子は首を振った。まったく食欲がなかった。(山本文緒『ブルーもしくはブルー』)

4.3 <欠如・消滅>系の語彙的否定形式

「無縁だ」、「欠けている」、「からっぽだ」などの<欠如・消滅>を表す語彙的否定形式とも共起する。

- (31) 山にずぶの素人が簡単に成功する筈もなかったが、志方はすでに新しい事業に意欲を燃やしていた。「それは信仰の道とはまるで無縁ではありませんか」(渡辺淳一『花埋み』)
- (32) この最初の要素は矮小ながらかれのなかにもあったが、あとの要素はかれにはまったく欠けていた。(倉橋由美子『聖少女』)
- (33) だが、水甕をのぞいた男は、絶望的な悲鳴をあげる。「おい、からっぽじゃないか!……こいつは、ぜんぜん、からっぽだぞ!」(安部公房『砂の女』)

4.4 <不一致>系の語彙的否定形式Ⅰ:「違う」「異なる」「別だ」類

<不一致>を表す語彙的否定形式のうち、「違う」「異なる」「別だ」類のものと共起も見られる。「ぜんぜん」の場合、今回収集した用例の中には、「異なる」と共起する例は見られなかったが、BCCWJで検索すると、例(39)のような例が見られる⁸⁾。

- (34) 「元気がいいね、北海道の出張から帰って来たときとはまるで違うな。よろしい、頼むよ」(松本清張『点と線』)
- (35) 夏の山と冬の山では様相が全然違っていた。(新田次郎『孤高の人』)
- (36) 地下道の無機質の色とは全くちがった、やわらかな光と色に、その階段は包まれていた。(浅田次郎『地下鉄に乗って』)
- (37) 販売店を対象とする講習で成功しているとはいえ、こんども農民や漁民も多く、年齢もまちまちである。毎日の仕事とは、まるでことなる世界について話すのだ。(星新一『人民は弱し官吏は強し』)
- (38) 転換のコードは計算士によってそれぞれに違う。このコードが乱数表とまったく異っている点はその図形性にある。(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)
- (39) だが帆があるとないとでは速度が全然異なる。(黒岩重吾『女龍王神功皇后』)
- (40) 「いいえ、会わなかったわ。私には彼女に会う理由がないような気がしたの。それはきっと私とはまるでべつのものだもの」(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)
- (41) 「光を頭に入れて考えるといいのだ、太陽の位置によって地形は全然別のように見えるものだ……」(新田次郎『孤高の人』)
- (42) 一方、龍子はまるで醜悪なものでも前を通るように、視線をまったく別の

方角にむけた。(北杜夫『楡家の人びと』)

4.5 <負の評価>系の語彙的否定形式

<負の評価>系の語彙的否定形式も、いずれの副詞とも共起が可能である。

- (43)「まるで、下手。箸を使うのも、喋るのも、みんな、下手」(沢木耕太郎『一瞬の夏』)
- (44)「本気だよ。ピアノだってそうさ。学校の勉強ぜんぜん駄目で、不良でさ」(北川悦吏子『ロングバケーション』)
- (45) なんだかその口調には、楡家の息子は名前だけのものしくてまったくく
くでなしだ、だからこそ女の自分がしっかりしなければならぬだと改めて納得しているようなおもむきがあった。(北杜夫『楡家の人々』)

4.6 <気にしない>系の語彙的否定形式Ⅰ：「平気だ」

<気にしない>系の語彙的否定形式のうち、「平気だ」も、いずれの副詞とも共起が可能である。収集した用例の中には、「まったく」が「平気だ」と共起している例は見られなかったが、BCCWJで検索すると、例(48)のような例が見られる⁹⁾。

- (46) おなかは空いているのかもしれない。けれど、まるで平気だった。(山本文緒『ブルーもしくはブルー』)
- (47)「だけど本物のまんじゅしゃげを見ると駄目ね、わたし。こわくなってしまうのよ。本物のまんじゅしゃげはね、わたしにはこわいわね。昔はぜんぜん平気だったのにね……」(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)
- (48) そのころはヤミ米の取締まりや、ストライキの強制解散、証拠なき犯人の逮捕のあと、かなり強引な取調べで自白へ持ち込んでも、全く平気でした。(胡桃沢耕史『翔んでる警視正』)

5 共起する述語のタイプに見られる相違点

「まるで」「ぜんぜん」「まったく」には、次のようなタイプの述語との共起において、相違点が見られる。

① 典型的な動作動詞の否定形式

- ② 形容詞の否定形式
- ③ 名詞述語の否定形式
- ④ <不一致>系の語彙的否定形式Ⅱ：「反対だ」「逆だ」類
- ⑤ <気にしない>系の語彙的否定形式Ⅱ：「いい」

5.1 典型的な動作動詞の否定形式

典型的な動作動詞の否定形式の場合、「ぜんぜん」「まったく」とは共起するが、「まるで」の場合、共起しにくい。例 (49)、(50) の場合、「まったく」に言い換えることは可能であるが、「まるで」に言い換えると不自然である¹⁰⁾。

(49) そして彼が煙草をふかすところを観察してみると、これがまた一種独特なものであった。彼はぜんぜん煙を吸いはしなかった。(北杜夫『榆家の人びと』)

(49') 彼はまったく煙を吸いはしなかった。

(49'') ? 彼はまるで煙を吸いはしなかった。

(50) 手術台のうえの患者におそろしく長い時間をかけて静脈注射を打つのに似た接吻のあいだ、未紀はまったく動かなかった。(倉橋由美子『聖少女』)

(50') 未紀はぜんぜん動かなかった。

(50'') ? 未紀はまるで動かなかった。

5.2 形容詞の否定形式

形容詞の否定形式も、「ぜんぜん」「まったく」とは共起するが、「まるで」とは共起しにくい。4節で示したように、「まるで」の場合、「～(が／の)ない」の形では共起が可能であるため、例 (51'')、(52'') のbのように、「～さがない」にすると、共起が可能になる。

(51) 「君はそんなに太ってないし、ぜんぜん醜くない」と私は言った。(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

(51') 「君はそんなに太ってないし、まったく醜くない」

(51'') a. ? 「君はそんなに太ってないし、まるで醜くない」

b. 「君はそんなに太ってないし、まるで醜さがない」

- (52) (前略)、要するに彼女たちは結婚まえのつまみ喰いの常習者であり、平均二十五歳の正規分布にしたがう年齢の女たちで、まったくクールでなかった。

(倉橋由美子『聖少女』)

- (52') ぜんぜんクールでなかった。
 (52'') a. ?まるでクールでなかった。
 b. まるでクールさがなかった。

5.3 名詞述語の否定形式

名詞述語の否定形式の場合、「ぜんぜん」、「まったく」とは共起するが、「まるで」とは共起しない。例 (53)、(54) は、それぞれ「まったく」、「ぜんぜん」へ置き換えて用いることも可能であるが、「まるで」への置き換えは不可能である。

- (53) 「ルルなにを調べてるの?」「たいしたことじゃない」そう、ぜんぜんたいしたことじゃない。それなのになぜ、こんな事態になってるんだ。(三浦しをん『まほろ駅前多田便利軒』)

- (53') まったくたいしたことじゃない。
 (53'') *まるでたいしたことじゃない。

- (54) 自分が見舞状を出さなかった胸の底には、もっと自分勝手な、冷酷な気持ちがあったはずである。と言って、この葉書の文面は全くうそではなかった。(三浦綾子『塩狩峠』)

- (54') この葉書の文面はぜんぜんうそではなかった。
 (54'') *この葉書の文面はまるでうそではなかった。

5.4 <不一致>系の語彙的否定形式Ⅱ：「反対だ」「逆だ」類

<不一致>を表す語彙的否定形式のうち、「反対だ」「逆だ」類は、「まるで」「まったく」とのみ共起する。次の例は「ぜんぜん」に置き換えられない。BCCWJでも、「反対だ」「逆だ」類と共起している例はほぼ見られない¹¹⁾。

- (55) 「そうですか。……もし、それがはっきりしますと、二人で庖丁を奪いあっているうちに、あやまって修一郎くんに刺さってしまった、とも考えられるわけです。非行少年はたいがい意志が弱く、自己顕示性が強いものですが、

- 私のみたところ、行助くんは、まるで反対なんです」(立原正秋『冬の旅』)
- (56) 意外なのは、ただ部落の広さだけではなかった。道が次第に上り坂になっていく。これはまったく予期に反したことだった。(安部公房『砂の女』)
- (57) 「もう一度お願いにあがりました。いろいろ御不満もあるでしょうが、私も一生懸命診察させていただきます。ですからどうか気を直して診察させて下さい」吟子は丁重に頭を下げると、まだ温かい饅頭の包みを男に差し出した。これでは医者と患者の立場はまるで逆である。(渡辺淳一『花埋み』)
- (58) 当然、謝罪と承諾の返事があるものと思っていた。しかし、耳をうたがうような、まったく逆な答があった。(星新一『人民は弱し官吏は強し』)

5.5 <気にしない>系の語彙的否定形式Ⅱ：「いい」

<気にしない>系の語彙的否定形式でも、次のような「いい」の形で<気にしない>系は、「ぜんぜん」とのみ共起が可能である。BCCWJでも、「まるで」、「まったく」が、<気にしない>という意味での「いい」と共起している例は見られない。

- (59) 「本当にせっかくのいい気分のときに、すみませんでした……」「いや、そんなのはぜんぜんいいんです」と、ぼくは言った。(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)

6 おわりに

本稿では、完全否定を表す「まるで」「ぜんぜん」「まったく」が共起する否定形式の述語のタイプに見られる共通点と相違点について述べてきた。その内容を表にすると次のようになる。なお、表中の「○」は、共起可能であることを、「×」は、共起不可能、または、不自然であることを示す。

表1. 完全否定を表す「まるで」「ぜんぜん」「まったく」が共起する述語のタイプ

共起する述語のタイプ			副詞	まるで	ぜんぜん	まったく
動詞の 否定形式	認識活動を表す動詞			○	○	○
	認識活動を表す動詞以外	非動作動詞及び可能動詞		○	○	○
		動作動詞		×	○	○
形容詞の否定形式				×	○	○
名詞述語の否定形式				×	○	○
形容詞相当の否定形式：「～（が／の）ない」				○	○	○
語彙的 否定形式	欠如・消滅	「無縁だ」「欠けている」「からっぽだ」など		○	○	○
	不一致	「違う」「異なる」「別だ」など		○	○	○
		「反対だ」「逆だ」など		○	×	○
	負の評価	「下手だ」「駄目だ」など		○	○	○
	気にしない	「平気だ」		○	○	○
「いい」		×	○	×		

表1を見ると、共起する述語において、「まるで」がもっとも共起制限が多いということがわかる。また、「まるで」が共起しないタイプの述語の場合、＜気にしない＞系の「いい」をのぞいては、「まったく」がその範囲を補っており、否定形式と共起する「まるで」の意味・用法は、「まったく」によって表すことができると言えそうである。

実際、「まるで」の場合、今回収集した用例のうち8割以上が、今回は対象外としていた、比況用法として用いられているものであり、現代日本語において、非比況用法として用いられている例は2割にも達しない。しかし、次の表2に見るように、明治期においては、非比況用法で用いられていることの方が多く、現代になるにつれて、比況用法へとシフトしていることが推察される。「まったく」の場合、今でも否定形式と共起して用いられることが多く、「まるで」が比況用法を現す副詞へとシフトしつつあるのは、このような類似した用法を持つ副詞との用法における棲み分けによるものかもしれない。今後、明治期の日本語も視野に入れて考察を行っていきたい。

表2.「まるで」の用例分布（明治期）

出典	意味・用法	比況	非比況
『CD - ROM版 新潮文庫 明治の文豪』		236 (28.4%)	595 (71.6%)
『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース』		138 (45.5%)	165 (54.5%)
合計		374 (33.0%)	760 (67.0%)

また、これらの副詞は、用いられるテキストタイプによっても、違いがあることが予想される。今回収集した例を、テキストタイプと意味・用法別に示すと、次の表3ようになる。表3からもわかるように、「ぜんぜん」の場合、ほとんどが否定形式と共に、完全否定を表す副詞として用いられる。「まったく」も完全否定を表すことの方が多いが、「ぜんぜん」との間に違いがあるとすれば、用いられやすいテキストタイプである。「ぜんぜん」は会話文で、「まったく」は地の文で用いられやすい。

表3. テキストタイプと意味・用法別用例分布

副詞	テキストタイプ 意味・用法	地の文		会話文	
		完全否定	その他	完全否定	その他
まるで		108 (12.8%)	587 (69.4%)	26 (3.1%)	124 (14.7%)
ぜんぜん		68 (37.8%)	0 (0%)	109 (60.5%)	3 (1.7%)
まったく		474 (57.4%)	174 (21.1%)	76 (9.2%)	102 (12.3%)

以上のことをまとめると、「まるで」の場合、先にも述べたように、比況用法にその比重を移行しつつあり、「ぜんぜん」や「まったく」が完全否定を表す副詞として用いられつつ、テキストタイプによる棲み分けが起きていると考えられる。

このような棲み分けが見られるのは、「まるで」「まったく」「ぜんぜん」が、互いに類似した用法を持ちながら、一方で独自の用法を持つ副詞であるからだと思われる。今後、時代による考察やテキストタイプ別の考察を行い、総合的な分析を試みたい。

付記：本稿は、「第146回変異理論研究会」（2012年1月22日、於：大阪大学）の発表原稿に修正・加筆を行ったものである。ご指導、ご意見くださった研究会の皆様へ感謝申し上げます。

注

- 1) 本稿で用いる「否定形式」は、主語と述語の結びつきを否定する文法的否定形式（例）彼女は幸せではない）だけでなく、単一概念を否定する語彙的否定形式（例）彼女は不幸だ）も含む。
- 2) これらは、飛田・浅田（1994）でも、例（1）～（3）のaと同じ意味・用法の中で扱われている。
- 3) 明治期以降の日本語を指して「現代日本語」と称することもあるが、鈴木（1986）でも指摘されているように、現代語といっても、明治期と現在とでは異なる特徴が見られることがある。「まるで」「ぜんぜん」「まったく」についても、明治期と現在とでは、用いられ方において異なる特徴が見られる。本稿では、便宜上、「現代日本語」の資料として1950年以降に出版されたものを用い、これらを「現代日本語」と称することとする。
- 4) 「度量形容詞類」とは次のようなものである（以下、服部2007より抜粋）。

日常的な意味で、程度差を数量として計れる形容詞等である。例えば「安い、遅い、短い、年上だ」はそれぞれ「1円安い、一日遅い、1cm短い、一歳年上だ」と言える。
- 5) 作品名については、稿末の用例出典を参照されたい。
- 6) 本稿では、記述の便宜上、「述語」のタイプとしているが、実際には、「全然面白くない話」のように、連体修飾節内で用いられている例も含まれている。なお、述語のタイプのうち、語彙的否定形式の意味的分類については、工藤（2000）を参考にした。
- 7) 本稿でいう「認識活動を表す動詞」とは、感性的な経験を示す動詞、思考活動を示す動詞、発見を示す動詞を指す（奥田靖雄1983：92～112を参照）。
- 8) 「ぜんぜん」が「異なる」と共起している例は3例見られた（本稿では、3例以上見られたものについては共起可能と判断した）。
- 9) 例（48）以外にも、15例見られた。
- 10) 「どこか調子が悪いのか、ポチが朝からご飯をまるで食べていない」のように用いると、許容度が上がるように思われるが、「シテイナイ」形との共起であり、

状態的である。現代日本語では、「まるで」が「シナイ」形と共起する例は見られない。小矢野（1995）に挙がっている例も、大正期の例となっている。中には、次のような例も挙がっているが、反復習慣を表すものであり、状態的である。

- ・実際、僕は学校ではずいぶんと喋るほうなのに、家ではまるで喋らないんだ。
（ピーター・キャメロン（山際淳司訳）（1992）『ママがプールを洗う日』筑摩書房）

11) BCCWJで見られたのは、それぞれ1例ずつのみであった（対談（雑誌）と国会会議録）。

- ・小島：たいへん誤解されて使われたこともありましたよね。「老人でもまだまだがんばるぞ」みたいな。全然反対なのに。（『ミセス』（2004年））
- ・このドイツと日本は、原子力の平和利用のために出発したのは大体同じ時期でございますけれども、その金の使われ方が全然逆でございます。（国会会議録（1978年））

参考文献

- 奥田靖雄（1983）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房、pp.21-149.
- 工藤真由美（2000）「否定の表現」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店、pp.93-150.
- 小矢野哲夫（1995）「程度副詞としての「まるで」」『日本語・日本文化研究』5、大阪外国語大学日本語講座、pp.1-14.
- 鈴木英夫（1986）「現代日本語研究における資料の取り扱いについて」『松村明教授古稀記念 国語研究論集』明治書院、pp.750-769.
- （1996）「「全く」の用法の推移と副詞としての特性について」『山口明穂教授還暦記念 国語学論集』明治書院、pp.458-484.
- 野田春美（2000）「「ぜんぜん」と肯定形の共起」『計量言語学』22 - 5、計量国語学会、pp.169-182.
- 服部匡（2007）「大規模コーパスを用いた副詞「全然」の共起特性の調査—朝日新聞とYahoo!知恵袋の比較—」『同志社女子大学学術研究年報』58、同志社女子大学、pp.1-8.
- 飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版

用例出典

※文庫版を使用した作品については、末尾に文庫版の出版年を示す。

浅田次郎（1994）『地下鉄に乗って』講談社文庫版（1999）

小川洋子（2003）『博士の愛した数式』新潮文庫版（2005）

北川悦吏子（1996）『ロングバケーション』角川文庫版（1998）

重松清（2002）『流星ワゴン』講談社文庫版（2005）

三浦しをん（2006）『まほろ駅前多田便利軒』文春文庫版（2009）

山本文緒（1992）『ブルーもしくはブルー』角川文庫版（1996）

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』（新潮社より1995年に刊行）

（以下、その他の資料）

国立国語研究所編（2005）『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース』（国立国語研究所資料集 15）博文館新社

『CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪』（新潮社より1997年に刊行）

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（国立国語研究所）

A study on the adverbs ‘*marude*’, ‘*zenzen*’ and ‘*mattaku*’

PARK Sooyun

This paper discusses what types of predicate are (im)compatible with the adverbs ‘*marude*’, ‘*zenzen*’ and ‘*mattaku*’. Although these adverbs all indicate ‘complete negation’ when they are used with a negative predicate, it is argued that there are six types of predicates that all of these adverbs are eligible for and that there are five types of predicates that not all of these can be used with. It is also discussed that what types of predicates are (im)compatible with these adverbs seems to have a tendency according to the text type and the era.